

論になるが、国生み神話は神婚という様式をとることによって、王権の生成を説こうとしていることが指摘できる。

「神統譜から国生み神話」を通して

制度論から 吳 哲男

「古事記」劈頭は天地開闢から国(神)生み神話へと展開されるが、このような「始まり」は言うまでもなく古代王権の制度的確立という「終り」(結果)を媒介にして可能となったものである。換言すれば、王権の確立が時間的に過去に遡って始源の世界までも秩序立ったものとして見通す論理を要請したということである。それは、王権の根源という現実にはありもしないものを現実に優越させる論理であるという意味で一つの「制度」といえる。

「記」は、国生み神話からイザナギとイザナミの未完成に終わった「国作り」までの展開を、「成る」↓「生む」↓「作る」の順で叙述している。この点に関連して本居宣長は「邦流と云言に三の別あり、一には、無りし物の生り出るを云、人の産生を云も是なり、神の成坐と云は其の意なり、二には、此物のかはりて彼物に変化を云(略)、三には、作事の成終るを云、国難成とある、成の類なり」(記伝三之巻)とあって、「成る」「生む」「作る」を同一範疇に属するものと考えている。この宣長説を踏まえながら丸山真男は、にもかかわらず「生む」「作る」がより強く「成る」へ親和してゆく、「成る」発想の優位こそ日本の歴史意識・国家意識にとって重要であると述べている。(『歴史意識の「古層」』)

しかし、丸山説の前提には「成る」と「作る」は対立する概念で、なかならず、明確な主体の存在する「作る」論理こそ西欧及び西欧国家に固有のものであるという目的論的な思考がある。ここでは丸山真男のヘーゲル的な史観を排すると、逆に宣長が「成る」ものの中に「作る」を見、「作る」ものの中に「成る」ものを見出し、この視点が重要になってくる。

すると、「成る」は「作る」と対立する概念ではなく、また「成る」ものが歴史の古層にあって後に「作る」が附加されるのでもない。逆に古代王権の秩序の確立——文脈に即していうと「国作り」——を前提として、「誰が」国を「作った」か、「誰が」人を「作った」か、「誰が」神を「作った」かと問うていって、論理の行きつくところに見出されたものが「成る」である。すなわち、「誰が」作ったかわからないものⅡ「自然が作ったもの」のことを「成る」といった。これを時間軸に置きかえれば、始源の神々が「成る」とされるのは論理上当然であろう。

これを文学の問題としていえば、「記」上巻を構成する上で、文学的な構成の限界点に見出されたものが「成る」論理であったといってもよい。

「神統譜から国生み神話」を通して

〈発表・討議〉その総括

古代文学を研究対象とする場合、〈発生〉を問うことは究極的な問題であると共に、古代文学研究の基盤にあるものとして意識し続